

野生の知識工学

——「暗黙知」の民族誌の為の序論——

福島 真人

-
- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1 聞き書きの限界、あるいは語られない知識 | 4 エコロジーとシミュレーション |
| 2 知識の分類学 | 5 「熟練の社会理論」の環境的制約 |
| 3 暗黙知の形式化とその批判者 | 結論 民族誌的研究の薬用と限界 |
-

論文要旨

民族誌が対象とする知識は、いわゆる聞き書きによって単純に構成されている訳ではない。社会的行為を基礎づける知識は、実は多くの場合言及が困難な、所謂方法知（ライル）、あるいは暗黙知（ポランニー）によって構成されており、それらは記述面で様々な困難を引き起こす事になる。専門家といわれる人達が持つ知識体系とは、まさにこうしたタイプのそれであるが、専門的知識を組織的に彼らから引き出し、それをコンピューターにプログラム化する為の研究を、一般に知識工学という。興味深い事に、この知識の転写過程で、ちょうど暗黙知の民族誌記述が持つと同類の問題が生じ、それゆえドレイファスのように、こうした試み自体が不可能であると強調する論者もいる。

体得された、暗黙知的な領域を研究する際に、もしその認知的内部構造を問わなければ、研究の方向は、ある種の伝統的な技能の長期的教育過程といったものにその焦点を合わせる事になる。その際には語りえないタイプの知識を、ある種の隠喩的な方法によって伝達していく事になる。だが一方で認知心理学者達は、より積極的に、こうした熟練の心理学的な基盤を定式化する努力を少しずつ続けてきた。こうした知識体系がある固有の領域で、具体的な文脈と深く関係するという指摘は、人類学でいう「具体的思考」に上手く当てはまる。

こうしたタイプの知識を研究する為には、諸分野の協同が不可欠であり、ここで民族誌的な試みを他の分野の研究と不自然に分離する事はできない。言い換えれば、民族誌的な企てとは、暗黙知についてのより大きな企ての一部を構成するものに過ぎない。そしてその事は、従来所謂「民族誌論」が陥っていた、自家撞着的な方法論の隘路を全面的に否定するものである。